

project niwa報告レポート

京都造形芸術大学 芸術表現・アートプロデュース学科 3回生
中井 美穂



・はじめに

京都大学医学部附属病院と京都造形芸術大学 芸術表現・アートプロデュース学科およびアート・コミュニケーション研究センター(ACC)が共同で行う「project niwa」は、新学期が始まり、慌ただしさも落ち着いてきた春の終わりごろにスタートしました。院内環境を、京都造形芸術大学の学生の作品を展示することにより改善し、コミュニケーションが生まれる場所をつくることを目指して始まった本プロジェクトに、私は学生スタッフとして当初より携わりました。

夏前に学内で作品公募を行い、展示作品を選出した後、1月に京都大学医学部附属病院の積貞棟内の4室での展示へと至りました。

・一人ひとりの庭に

「niwa」(neighborhood improvement by works of art)というプロジェクト名は、実際に病院を視察したあとにスタッフ同士で話し合い、生まれたものです。最初は種をまくようなほんの小さなことから始まり、いつか病院の人たちにとって、自分の家の庭のような身近さで接し、自分たちで育て、見守っていけるようなプロジェクトになればいいな、という思いから「niwa」の名前はつけられました。

- ・「病院」という空間に変化を起こしたい

京都大学医学部附属病院は、患者・医師・職員など合わせて一日7000人もの人が行き交い、多くの人が過ごす大病院です。入口のエントランスホールには、長い診察時間を待ったり、コーヒーを飲みながら時間をつぶす多くの人たちがいました。

病院を視察した際に、私たち学生スタッフで話し合い、「作品を展示するだけで果たして院内環境改善につながるのか？ また、コミュニケーションの促進につながるのか？」という1つの疑問が浮かんできました。

そして自分たちができることで、この疑問を解決することは可能であるか、話し合いました。「病院の顔」ともいえるエントランスホールの植物を統一し、明るい環境へと変える案や、さらにはアトリウムホールという巨大な待合室でも作品を展示したり、ワークショップを行う案など、環境改善・コミュニケーションが促進されるような様々なしなげづくりを考えました。

しかし、「病院」という一つの場において、出来ること出来ないこと、様々な問題にぶつかりました。たとえこちらが好意でやっていたとしても、必ずしも相手はそのように受けるとは限らない。かえって患者さんや訪れる人を不快にさせてしまうことがあるかもしれない。様々な点を考慮しつつ、企画を考えていくことは容易ではありませんでした。

そういうとき、先生をはじめ、薬剤師の経験があった子、病院関係者の友人たちと相談し、自分たちだけでは見つからなかった盲点や、配慮しなければいけない点にも数多く気づきました。最終的に、自分たちが企画した案は実現することはありませんでしたが、企画してみて学んだこと、気づいたことも本当に多くありました。「社会」とアートをつなぐ方法を、まだまだ模索していかなければならないと思います。

- ・今回のプロジェクトを経験して

今回展示を行った積貞棟内の4作品が、患者さんや病院関係者の目にどう映るのか、とても気になります。学内で作品を公募し展示作品が決定した後、展示へと至るまで非常に長い時間がかかり、様々な問題にもぶつかりました。

このプロジェクトに携わって、全てを実現することは不可能だということと、物事を変えていく難しさを痛感しました。アートと社会を結ぶには、まだまだ課題が山積みではあります。しかしだからこそ、この展示が出発点となって、また次のステップへと挑戦する機会につながれば、と考えています。